
日本韓国研究

第1号

〈書評〉

飯倉 江里衣 著

『満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史
—日本植民地下の軍事経験と韓国軍への連続性—』

崔 誠姫

2021年9月30日

日本韓国研究会

Japan Association of Koreanology

〈書評〉

飯倉 江里衣 著

満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史

—日本植民地下の軍事経験と韓国軍への連続性—

崔 誠姫（日本女子大学）

本書は飯倉江里衣氏（神戸女子大学文学部国際教養学科助教）による、博士論文をもとにした著書である。まず、本書の構成は以下のとおりである。ページ枚数の関係上、節は割愛させていただいた。

序章 日本植民地下で培われた軍事経験の継続の問題を問う

第Ⅰ部 植民地下の朝鮮人と満洲国軍（1932～1945年）

第1章 関東軍による朝鮮人支配の実態—朝鮮人の中央陸軍訓練処への入校（1932～1939年）

第2章 「五族協和」と「内鮮一体」の虚構—朝鮮人の陸軍軍官学校への入校（1939～1945年）

第3章 朝鮮人部隊「間島特設隊」の虐殺経験（1938～1945年）

補論 間島特設隊のもう一つの軍事経験—間島における朝鮮人抗日部隊鎮圧

第Ⅱ部 植民地解放後の満洲国軍出身朝鮮人と韓国軍（1945～1948年）

第4章 満洲国軍出身者の知られざる解放直後の「左翼」経験

第5章 韓国軍の民間人虐殺に満洲国軍出身者はいかにかわったのか—麗水・順天抗争時の鎮圧作戦から（1948年10月）

終章 満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史から見えてくるもの。

本書の内容は以下のとおりである。まず、序章において満洲国の軍隊で日本の軍事教育を受け、解放後に韓国でその経験を軍人として「活かした」朝鮮人たちの歴史を追うとし、そこには4つの視点あるとする。その4つの視点とは
①韓国という国家がどのような歴史的・社会的背景をもってつくられたのか。
②解放後の韓国において「親日派」が政権の中枢を占めた点。

③日本の植民地支配もまた、支配をより容易に行うためコラボレーターを作り出した。

④第二次世界大戦後の朝鮮半島、ないしは東アジアにおける米国のプレゼンスやヘゲモニーを批判的にみる視点。

であるとする。さらに満洲国軍に入隊した朝鮮人による解放前後（1932～1948年）の軍事経験を明らかにすることによって、日本の植民地下での朝鮮人による軍事経験が解放後の韓国にどのように引き継がれたのかを考察するとし、それを明らかにするため3つの仮説を立てている。仮説の内容は以下のとおりである。

仮説：満洲国軍朝鮮人による解放前後の軍事経験には

- 1) 虐殺をとまなう鎮圧作戦の指揮官
 - 2) 現場指揮官の裁量による「即決処分」を可能にした権限の存在
 - 3) 抵抗する民間人は「共匪」とみなし処分すべしという虐殺のイデオロギー
- という3つの連続性があり、その検証を行うことを本書の目的としている。

第I部は植民地下の朝鮮人と満洲国軍（1932～1945年）について、3章と補論で論じている。第一章では朝鮮人の中央陸軍訓練処（以下、中訓）への入校を追う。そこには日系と満系の区別があり、朝鮮人は満系とされた。「日系」は幹部候補生で朝鮮人が含まれる余地はなかったことを明らかにしている。第二章では、陸軍軍官学校受験の背景について方圓哲、金永澤、金潤根、金光植らのケースをもとに整理している。この中で金光植のみが「日系」として採用されている。金光植は徹底的に「日本人化」されたていた人物であり、ほかの陸軍軍官学校（以下、軍校）出身者とは共有できない差別経験があったことを、インタビューを通じて論じている。3章では間島特設隊の創設背景について、間島特設隊がもっていた民間人「即決処分」について述べている。間島特設隊に対しては抗日武装勢力の「即決処分」を可能にする「臨陣格殺」の権限を定めた「暫行懲治盗匪法」第7条・第8条が効力を有し、現場指揮官の裁量によって多くの「即決処分」が行われた。抗日武装勢力のみならず、民間人にも適用されたことを明らかにしている。さらに補論では、間島特設隊の朝鮮人抗日部隊鎮圧を、①訓練討伐期、②「天宝山戦闘」と「大沙河戦闘」における日本軍の大敗、③「吉林・間島・通化三省治安肅清」期の三期に分けて論じ、間島特設隊の民間人との接触経験についても言及している。地域の民間人から敵に関する情報収集活動の経験により、朝鮮人同士ということもあり「良好」な関係が形成される一方、中国人は非協力的であったことからその違いが民間人虐殺に通じていったとも指摘している。

第II部は植民地解放後の満洲国軍出身朝鮮人と韓国軍（1945～1948年）について、2章で論じている。第4章では解放直後の武力団体の混乱について論じたうえで、米軍政庁が1946年1月南朝鮮に南朝鮮国防隊以外の武力行為を禁止す

るが、それに先立ち 1945 年 12 月 5 日「軍事英語学校」（以下、軍英）を設立している。軍英卒業生には日本軍及満洲国軍出身者が極端に多いことを、資料から明らかにしている。一方で李奇建、方圓哲ら、1946 年 2 月にソウルから北朝鮮へ渡り、1947 年 8 月より約 5 か月間朝鮮人民軍創設に携わるも翌年、スパイ容疑で拘禁され、1948 年 9 月南朝鮮へ渡りのち韓国軍に入隊している事実に触れ、解放から南北政府樹立直後の時期までの武力団体をめぐる混乱を明らかにしている。第 5 章では満洲国軍出身朝鮮人の解放後の軍隊経験、序章で提示した仮設の検証を行っている。1948 年 10 月の麗水・順天抗争において、鎮圧作戦における実質の最高指揮官は満洲国軍出身の金白一であり、彼の「権限」の下で軍や警察による民間人「即決処分」が行われた。米軍は麗順抗争の蜂起軍を一貫して共産主義者とみなし、韓国軍による彼らに対する虐殺も黙認し、麗順抗争時の鎮圧作戦において韓国軍は蜂起軍に加わった民間人を、共産主義者であるとして虐殺した。この事実は「共匪」は殺さなければならないという日本軍による虐殺イデオロギーが解放後まで引き継がれたと論じている。

終章では結論として、序章で提示した仮説について、連続性がみられることを先行研究及び資料を通じて立証した。満洲国軍朝鮮人の解放前後史を通して見えてくるのは、日本の植民地支配によってもたらされた暴力の連鎖と、そのような暴力の継続が可能な解放後の空間を作り出した米国による新たな植民地主義構造であるとしている。以上が本書の内容の要約である。

本書の成果としては、以下の三点が挙げられる。第一に、満洲国軍の朝鮮人を通し解放前後史をみることで、植民地の連続性や南北分断以前からの朝鮮人の「分断」を浮き彫りにし、克服されない「植民地主義」とその背景にある「共匪」イデオロギーを明らかにした点である。第二に、朝鮮人に対する「排除」と「包摂」のメカニズムを明らかにし、満洲国や植民地朝鮮運営のコラボレーター、民衆虐殺の「駒」となった朝鮮人の姿を浮き彫りにした点である。第三に、満洲国軍出身者の口述史料を収集した点である。日本人かつ女性としてインタビュー時には様々な困難が伴ったと思われる。著者の史料収集への強い意志の結果によるものといえよう。

最後に本書の疑問点について、いくつか述べることにする。本書の 98 頁にて就学率のジェンダー問題を提示されている。これは男女間の差や階層把握のために必要ではあるが、分析が若干足りないのではないと思われる。軍事エリートという選択肢がある男性に対し、女性にはその機会が与えられない。性別が異なる時点で得られる機会に差があるという点や、エリート男性であるからこそ軍校・中訓、さらには軍英を選ばざるを得なかった状況もあったのではないだろうか。また、第二章では金光植の「日本人化」についてたびたび言及されているが、本書でいう「日本人化」が何を示すのかが漠然としており、唯一彼が「日系」となれた背景が今一つ見えてこない。この点については、更に分

析を深める必要があるのではないだろうか。

満洲国軍出身朝鮮人が「即決処分」を経験したことにより、その経験は韓国軍にも引き継がれ、麗順抗争にも持ち込まれることとなった。「共匪」イデオロギーが持つ暴力性ととも、彼らの「出世欲」を満たす手段としてもそれらが用いられ、その結果民衆虐殺が行われた。これは李承晩政権後に続く朴正熙・全斗煥政権に連なる、植民地支配から独裁政権のコラボレーターとなった軍人の「暴力性」の連続を感じずにはいられない。

(2021年2月20日 有志舎 380頁 6,800円+税)

日本韓国研究 第1号

発行日 2021年9月30日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 崔銀景 趙智英

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology